

みやもと けんじ

宮本 顕治

光市
(1908～2007)



提供・毎日新聞社

【著作】

『敗北の文学』（昭和21・岩崎書店）
『宮本百合子の世界』（昭和55・新日本出版）
『宮本顕治文芸評論選集』全四巻
（昭和41～55・新日本出版）ほか

「私は、瀬戸内海に面した山口県の農村―熊毛郡光井村（現・光市光井）に生まれた。その小学校を出て、徳山中学四年修了で十六歳のとき松山高等学校に入学した。当時、高校柔道で有名だった松高柔道部から誘われた点もあったのだが、南の国、漱石の『坊っちゃん』の地への何かしらの期待もあった。」は『宮本顕治現代論集』全十六巻の中、「私の五十年史」（救国と革新をめざして）所収の一節である。

宮本顕治は、東大経済学部在学中に雑誌『改造』の懸賞文芸評論に応募し、芥川龍之介論『二敗北』の文学」で第一席となって文壇に登場した。第二席は小林秀雄の「様々なる意匠」で、この二人が示した進歩的で芸術的な論旨は、その後の昭和文学史の進路を方向づけた。

以後宮本は、昭和六年（一九三一）共産党に入党し、同七年（一九三二）に中条（宮本）百合子と結婚するも、日本プロレタリア文化連盟弾圧をのがれ、小林多喜二とともに地下生活に入り、「政治と芸術・政治の優位性に関する問題」を発表する。昭和八年（一九三三）、評論集『レーニン主義文学闘争への道』を刊行するも、その年の暮れから太平洋戦争終結まで獄中生活となる。

戦後は、共産党中央委員として、書記長、委員長と働きながら、『宮本顕治文芸評論選集』等を刊行し、野間宏の「真空地帯」を否定する評論家達と論争し、かつてのプロレタリア文学時代の機械的、観念的な論評を批判する。

前述の論集中、『宮本顕治対談集』では、「徳山の近くに光市がありますけれども、昔は虹ヶ浜という浜がありまして、そこは文字どおり白砂青松で、三里ぐらいつつと続いています。水もきれいで、そこで子どものころから泳いだもんですから、海が子どもの生活と結びついていたんですね」と郷愁も述べている。

昭和十六年（一九四一）、私が旧制徳山中学一年の冬、柔道の寒稽古中に道場壁面の、明治開校以来柔道部員の名札が並ぶ中で裏返しされた一枚があった。旧友の肩車で返してみると「宮本顕治」とある。その時居合わせた国漢の教師が、「おお、宮本は徳中でワシと同期じゃ、東大を出たが共産主義者で、現在は刑務所に居るがのー」となつかしげに語った思い出があり、遠い潮騒のように今もよみがえってくる。

（文・福田礼輔）



宮本顕治と宮本百合子（昭和23年）
提供・日本近代文学館



論文「敗北」の文学」が掲載された雑誌『改造』（1929年8月号）

宮本 顕治 年譜

（提供・玉木伸尚）

10月17日、山口県熊毛郡光井村（現・光市）に生まれる。

山口県立徳山中学校入学。

松山高等学校入学。

東京大学経済学部入学。

8月「敗北」の文学―芥川龍之介氏の文学について―が雑誌『改造』懸賞論文の一等入選、同誌に掲載される。

東大経済学部卒業。手塚英孝らの推薦で日本共産党入党。日本プロレタリア作家同盟の一員として活発な文芸評論活動を行う。

中条（宮本）百合子と結婚。コップ（日本プロレタリア文化連盟）に対する弾圧が始まり、検挙を避けて地下活動に入る。論文「政治と芸術・政治の優位性に関する問題」発表。

共産党中央委員になる。12月、検挙され、麹町署に留置される。これより十二年間獄中生活を送る。論文「文化サークル活動への懐疑的清算主義的傾向に対して」「文化・芸術運動の基本的方向の歪曲に抗して」発表。『レーニン主義文学闘争への道』出版。麹町署から警視庁の留置場に移送。のち、猩紅熱にかかり市ヶ谷刑務所の病監に収容。その後、品川署、警視庁、府中署留置所を経て、市ヶ谷刑務所に移送。

6月、市ヶ谷刑務所から巣鴨の東京拘置所へ移される。『文芸評論』出版。

12月、治安維持法違反で無期懲役の判決を受け、上告。

5月、上告審破棄され刑確定。6月、巣鴨の東京拘置所から網走刑務所に移送。8月、日本敗戦。10月、連合軍総司令部が、治安維持法の撤廃、すべての政治犯の釈放を指令。網走刑務所から出所。12月、共産党中央委員に就任。

1月、宮本百合子死去。『百合子追想』出版。『宮本百合子全集』の「解説」執筆。（一九五一～一九五三）

『批判者の批判 上巻 文学運動の前進のために』『あげしおに向うために 批判者の批判 下巻』出版。

宮本百合子の秘書であった大森寿恵子と再婚。

共産党書記長に就任。

新日本出版社より全四巻の『宮本顕治文芸評論選集』の刊行が始まる。

共産党幹部会委員長に就任。

参議院議員初当選。一九八九年まで二期12年務める。

共産党中央委員会議長に就任。

共産党議長、引退。名誉議長になる。

第22回党大会で、名誉役員になる。

7月18日、老衰のため死去。

私はもう結論してもいいだろう。

芥川龍之介氏の文学の「最後の言葉」は、社会生活における人間の幸福への絶望感であった。あらゆる厭世主義者のように、氏は「人間に負はされた永遠の世界苦」に結論を発見せずにはいられなかった。それは決して新しい思想ではない。新しい感情ではない。それは「自己」への絶望をもって、社会全般への絶望におきかえる小ブルジョワジーの致命的論理に発している。かくて芥川氏は氏の生理的、階級的规定から生まれる苦悩を人類永遠の苦悩におきかえる。

（中略）

なるほど我々は最後の凄まじい情熱をたたえた氏の遺稿等に関心になり得ない。だが、それは芥川氏の文学が、我々を内容的には退嬰的なニヒルへ誘い、形式的には瑰麗な肌ざわりを持つているということより、次の事実によるものでなくてはならぬ。ブルジョア芸術家の多くが無為で怠惰な一切のものへの無関心主義の泥沼に沈んでいる時、とまれ芥川氏は自己の苦悶をギリギリに噛みしめた。また他の進世的な作家達に、風流的安住が無力であるのみならず、究極において自己を滅ぼすものであることを、氏自身の必死的な羽搏きによって警告した。また氏は多大の小ブルジョアの狭隘性を内包しつつも、尚他のブルジョア・イデオログに比して、広汎な社会的関心を持つていた―およそ、これらの事実においてなくてはならぬ。「後世の士は我々の謬りを咎めるよりも、むしろ我々の情熱を諒としてくれるであらう。」こういう言葉に息苦しい闘いの楯を求めた芥川氏の姿は、なにか惻々として我々を打つてはなないか。

だが、我々は如何なる時も、芥川氏の文学を批判し切る野蛮な情熱を持たねばならない。我々は我々を遅くするために、氏の文学の「敗北」的行程を究明して来たのではなかったか。

「敗北」の文学を―そしてその階級的土壌を我々は踏み越えて往かねばならない。

「敗北」の文学―芥川龍之介氏の文学について―
（『宮本顕治文芸評論選集第一巻』所収）より